宇陀を駆けた人々 1

ー伊能忠敬（いのうただたか）ー

悠久の歴史を刻んできた宇陀。古代から現代まで多くの人々が宇陀を駆けぬけていきました。神話や伝説の世界の人々、実在の人々、宇陀の歴史に欠くことのできない人々をご紹介します。

伊能忠敬と日本地図

今、私たちが普通に使っている地図。最初に科学的な測量によって地図がつくられたのは、いつ頃かご存じですか。

江戸時代、寛政12年（１８００）から文化13年（１８１６）まで、17年をかけて全国を測量し、『大日本沿海輿地全図（だいにほんえんかいよちぜんず）』という地図の完成によって、日本の正確な姿が明らかとなりました。これが、日本最初の科学的な地図です。

この地形測量を行ったのが、伊能忠敬。彼のプロフィールをご紹介しましょう。忠敬は、延享2年（１７４５）、現在の千葉県九十九里町で生まれました。17歳で伊能家の当主となり、佐原（現在の千葉県香取市）で実業家として活躍しました。その後、家督を譲り、隠居し、50歳で江戸に出ました。江戸では、天文・暦学を学び、自宅に観測所を作って太陽や恒星の高度などを熱心に観測しました。師匠が地球の大きさを知りたがっていることがわかり、「地球の大きさは計算できる」そう思いつくと、すぐ実行にとりかかりました。

「日本列島測量の旅」のはじまりです。

寛政12年の蝦夷地（現在の北海道）の測量にはじまり、10回にわたって、全国を測量しました。忠敬は第9次の伊豆七島測量を除いて全測量に従事しました。その測量距離は約4万キロ、忠敬自身の旅行距離は3万5千キロに達しました。

文政元年（１８１８）、忠敬は73歳で亡くなりましたが、地図の編集作業は続けられ、文政4年（１８２１）、『大日本沿海輿地全図』が完成しました。この地図は、極めて精度の高いもので、ヨーロッパにおいて高く評価され、近代日本の基本的な地図として、活用されました。

文化5年（１８０８）の第6次の測量では、忠敬ら一行は宇陀を訪れています。さて、どの辺りを訪れたのでしょうか。

文・柳澤一宏（文化財課）

人権コーナー

さまざまなリボン運動

右下のようなリボンを胸などに着けている人を見かけます。

その色はひとつだけではなく、現在世界中でさまざまな色のリボン運動があり、レッドリボンやピンクリボンなどは、よく知られています。

このリボンのそれぞれの意味をご存知でしょうか？

リボンの色は、国によっては異なった運動のシンボルマークに使われているものもあり、日本で始められた運動として、オレンジリボンは、「児童虐待防止の活動」の象徴で、栃木県で亡くなった幼い兄弟の虐待死をきっかけに活動が広がっています。

今回は、さまざまな種類のリボンに願いを込めた「キャンペーンリボン」の主な種類・趣旨についてご紹介します。

【ブルーリボン】

「北朝鮮による拉致被害者の救出」と「リボンは核兵器より強し」という理念のもと、北朝鮮と祖国日本を隔てる「日本海の青」をイメージしたものです。１９９７年、北朝鮮による拉致被害者家族連絡会が結成され、その家族会への支援が広がるとともに、リボン運動も活発になりました。

【パープルリボン】

１９９４年、アメリカ・ニューハンプシャー州の小さな町で、性暴力被害の生存者によって作られました。暴力被害者にとってより安全な社会になることを目的に取り組まれています。

【ピンクリボン】

アメリカで、乳がんで娘を亡くした母親が、孫にも同じ悲しみを繰り返さないようにという願いを込めて手渡したのがピンクのリボンといわれています。乳がんの正しい知識を広め、乳がん検診の早期受診を推進するための世界規模のキャンペーンが行われています。

【イエローリボン】

障がいのある人々の社会参加の推進をめざすシンボルマークです。障がいがあっても、住み慣れたまちで、心豊かにその人らしく暮らし、学び、働くことができる社会をめざして、取り組まれています。